



天のろくろ / *The Lathe of Heaven* (1971) / アーシュラ・K・ル・グイン (協明子訳) / サンリオ (文庫・6/25刊・¥380)

オアは夢を見る。しかし、夢は、世界の現実を変貌させる“力”を持っていた。昨日までの現し世が、オアの夢見と共に消散、再構成されるのだ。精神医ヘイバーは、その夢を利用しようとする。七〇億の人口の下に、疲弊し、弱々しいあえぎを繰り返す地球——そこで、彼は救世主たりうるのだ。ヘイバーの催眠暗示一つで、世界は“望ましい方向”へと変わっていく……。

ディックらが好んで扱う「夢のまた夢」という設定である。ディックを持ち出すまでもなく、“夢オチ”はSFの常套手段だ。夢と現実の対立、現実の中の夢、夢の中の現実、あるいは夢の中の夢と、バリエーションは限らない。だが、ル・グインはその中に明白な思想を描き込んだ。こういう例は比較的少ないはずである。最近、主張が前面に出すぎると、一部から批判されるル・グインだが、本作品ではそういった欠陥も目立たない。

主人公オアは、ヘイバーの暴力的で急激な変革を嫌う。これは、訳者の言う、老荘思想であると同時に、ル・グイン流の革命的非暴力主義にも連なっている。本年上半期のSFの中でまずはベストといってよい。(俊)